

第Ⅰ章 序 言

本報告は、平城京左京三条一坊一・二・八坪において、独立行政法人国立文化財機構奈良文化財研究所（以下、奈文研と略記）が平成22年度から平成27年度まで実施した計11次にわたる発掘調査成果をとりまとめたものである。これまでの調査の概要是、奈良文化財研究所紀要2011～2016にて報告している。

1 調査経緯

調査地は平城宮の正門、朱雀門の南東に位置し、その範囲は平城京左京三条一坊一坪、二坪の北辺、八坪の西3分の1に及ぶ。

調査地は、昭和63年（1988）に開催された「なら・シルクロード博覧会」において、奈良市が北新大池（八坪）にシルクロード博記念館を建設し、その西側の敷地（一坪）は記念館のエントランスおよび広場として整備した。博覧会終了後も記念館は存続し、記念館西側の敷地は、朱雀大路緑地として記念館とともに奈良市が管理していた。平成2年（1990）には、棚田嘉十郎の銅像が造られ朱雀大路緑地に建立された。

シルクロード博記念館

調査地の周辺は、これまで段階的に整備事業がおこなわれてきた。二条大路は昭和54年（1979）、特別史跡平城宮跡に追加され、昭和61年（1986）から復原表示整備を開始した。調査地西北に位置する朱雀門は、文化庁が平成元年（1989）から復原基壇の工事を開始し、平成10年（1998）に復原建物が竣工した。一方、朱雀門の正面に位置する朱雀大路は、平城京朱雀大路跡として昭和59年（1984）に国史跡に指定された。のちに、奈良市が平成元年に仮整備を実施し史跡公園とした。さらに整備を進め、朱雀大路東側溝、街路樹、二坪の北辺と西辺の築地塀、下ッ道の位置などを復原整備し、平成10年に一般に公開した。

国 史 跡
平 城 京
朱雀大路跡

日本政府は平成20年（2008）10月に、平城宮跡を既存の「国営飛鳥歴史公園」と一体的に整備を進める国営公園として「国営飛鳥・平城宮跡歴史公園 平城宮跡区域」（以下、平城宮跡歴史公園と略記）と命名することを閣議決定した。これを受けて国土交通省が特別史跡平城宮跡の国有地を中心に、国史跡平城京朱雀大路跡とその東側の敷地（朱雀大路緑地と北新大池を含む）を加え国営歴史公園の区域（面積約122ha）にした。

平 城 宮 跡
歴 史 公 園

国土交通省近畿地方整備局国営飛鳥歴史公園事務所（以下、国営飛鳥歴史公園事務所と略記）は、平城宮跡歴史公園の来園者が平城宮跡の歴史的文化的意義を理解する助けとするため、平城宮跡の概要を解説し、出土品を展示する施設である仮称平城宮跡展示館（現平城宮いざない館）を朱雀大路緑地に設けることを計画した。この施設の建設設計画にともない、奈文研は国営飛鳥歴史公園事務所からの依託を受け、平成22年度から展示館建設予定地を発掘調査することとなった。朱雀大路緑地となっていた一坪部分（第478・486・488・491・495次調査）から発掘調査に取りかかり、平成25年（2013）年1月には、奈良市シルクロード博記念館の解体に先駆けて、記

平 城 宮
いざない館

念館の北と南の池部分に試掘（第502次）をおこない、建物解体終了後に建物の東側（第515次東区）および建物の西側（第515次北区・南区、第522次）を発掘調査した。工事にともなう補足調査（第555・557次調査）を最後に、発掘調査は平成27年（2015）をもって終了した。発掘調査終了後、平城宮いざない館の建設工事を開始し、平成30年（2018）2月に竣工、同年3月に開館した。同時に隣接する朱雀大路および二条大路も奈良時代の道路幅や側溝、街路樹などを復原整備し、朱雀門ひろばとして公開された。

朱雀門
ひろば

平城宮いざない館建設に先駆けて実施した発掘調査成果の概略は先述のごとく公表しているが、その後、遺構、遺物を含めて総合的に研究をおこない、平城宮正南の左京三条一坊一・二・八坪の遺構変遷とその土地利用の実態をあきらかにしたのが本報告である。遺構や遺物の解釈について既報告の見解とは異なる部分もあるが、本書をもって正式の見解とする。今後、周辺地域の発掘調査の増加によって新たな研究の進展を期したい。

2 調査組織

本報告が対象とする調査について、調査責任者（所長および都城発掘調査部平城地区責任者）、調査担当者、調査に参加した研究員（現場班）を調査次数ごとに列記する

調査次数	年 度	所 長	部 長	調査担当者
478次	平成22（2010）	田辺征夫	井上和人	大林 潤
486次	平成23（2011）	田辺征夫	井上和人	神野 恵
488次	平成23（2011）	田辺征夫	井上和人	諫早直人
491次	平成24（2012）	松村恵司	深澤芳樹	山本祥隆
495次	平成24（2012）	松村恵司	深澤芳樹	川畑 純
502次	平成24（2012）	松村恵司	深澤芳樹	芝 康次郎
515次	平成25（2013）	松村恵司	小野健吉	小田裕樹
522次	平成25（2013）	松村恵司	小野健吉	山本祥隆
555次	平成27（2015）	松村恵司	渡邊晃宏	山本祥隆
2015-7次	平成27（2015）	松村恵司	渡邊晃宏	桑田訓也
557次	平成27（2015）	松村恵司	渡邊晃宏	桑田訓也
研究員				
478次	今井晃樹・浅野啓介・国武貞克			
486次	小池伸彦・川畑 純・海野 聰・橋本美佳			
488次	箱崎和久・馬場 基・石田 由紀子			
491次	渡辺丈彦・青木 敬・海野 聰			
495次	小池伸彦・神野 恵・松下迪生			
502次	箱崎和久・馬場 基・石田 由紀子・新田敬介			
515次	小池伸彦・箱崎和久・馬場 基・神野 恵・庄田慎矢・松下迪生・三好勇太※			
522次	箱崎和久・青木 敬・芝 康次郎・大澤正吾・清野陽一			
555次	箱崎和久・青木 敬・芝 康次郎・大谷育恵			

2015-7次 石田 由紀子・丹羽崇史・鈴木智大・小田裕樹・海野 聰・山本祥隆

577次 丹羽崇史

発掘調査に関わる遺構の写真撮影は当研究所企画調整部写真室の中村一郎、井上直夫、栗山雅夫、飯田 ゆりあ、杉本和樹、鎌倉 紗、岡田 愛による。

(※香川県綾川町教育委員会)

3 報告書作成（凡例）

報告書の作成は、都城発掘調査部平城地区の研究員が主体となっておこなった。遺構の検討は遺構研究室、文献や史料の調査は史料研究室が担当し、遺物の整理・研究は、考古第一・第二・第三研究室が分担して実施した。また、遺構・遺物の自然科学分析では、埋蔵文化財センターの年輪年代研究室ほか、外部の専門家、研究機関の協力を得た。

1. 本報告本文編の執筆担当は以下のとおりである。

第Ⅰ章 序 言：今井晃樹

第Ⅱ章 調 査：今井晃樹

第Ⅲ章 遺 構

1・2：山崎有生、3：小池伸彦・山崎有生

第Ⅳ章 遺 物

1：神野 恵・大澤正吾、2：林 正憲、3：山本祥隆、4、5：浦 蓉子、6：小池伸彦、
7：山崎有生・浦 蓉子、8：芝 康次郎・浦 蓉子・バンダリ スダルシャン（株式会社パ
レオ・ラボ）

第Ⅴ章 自然科学分析

1：杉山真二（株式会社 古環境研究センター）、金原正子・金原美奈子（一般社団法人 文化
財科学研究センター）、2：鈴木瑞穂（日鉄テクノロジー）、3：星野安治・浦 蓉子・高橋
敦（古生態研究所）、4：星野安治

第Ⅵ章 考 察

1：山崎有生、2：山本祥隆・山崎有生、3：小池伸彦

第Ⅶ章 結 語：今井晃樹

英文要旨

図面・図版

資 料

2. 図版編の作成者は以下のとおりである。

図面 遺構平面図：山崎有生

図版 発掘遺構：山崎有生・小池伸彦、土器：神野 恵、埴輪：大澤正吾、瓦磚：林 正憲、
木簡：山本祥隆、木製品、金属製品ほか：浦 蓉子、冶金関連遺物：小池伸彦、井戸部材：
山崎有生・浦 蓉子、植物遺体：芝 康次郎・浦 蓉子・バンダリ スダルシャン（株式会社パレオ・
ラボ）、土壤分析：杉山真二（株式会社 古環境研究センター）、金原正子・金原美奈子（一般社団法
人 文化財科学研究センター）、冶金関連遺物分析：鈴木瑞穂（日鉄テクノロジー）、樹種：星野安治・

浦 蓉子・高橋 敦（古生態研究所）

出土遺物の写真撮影と印刷用図版の作成は、中村一郎・飯田 ゆりあが担当し、鎌倉 綾が協力した。

3. 図面・図版・挿図・表の作成にあたっては以下の奈文研職員および調査アシスタントの協力を得た。遺構：鎌田礼子、土井智奈美、西村真紀子、前田真理子、木器・金属製品等：長谷川 陽美・坂上 加江子・猪熊 はるの・壁 阿紀・坪井直子・高津綾乃・森脇 多恵子・南本 忍・高田淳子・五味直子・北尾智美、土器：中西豊子・森本 真由理・福田清美・丸山美和・泉谷 美雪・並河 由佳子・大久保 紗乃・稻本悠一・田中秀弥・下川 真里菜・内田菜々子・澤井裕輝、瓦磚：森下しのぶ、山川聰子。

4. 奈文研の過去の刊行物に関しては、以下のような略称を用いた。

『奈良文化財研究所紀要2015』	→	『紀要2015』
『奈良国立文化財研究所年報1995』	→	『年報1995』
『平城宮跡発掘調査報告XV』	→	『平城報告XV』
『昭和55年度平城宮跡発掘調査部発掘調査概報』	→	『昭和55平城概報』
『飛鳥・藤原宮発掘調査概報26』	→	『藤原概報26』

5. 遺構図の座標値はすべて世界測地系による平面直角座標系第Ⅳ系の数値である。標高は東京湾海水面を基準とする海拔高で表わす。

6. 発掘遺構は、遺構の種別を示す以下の記号と一連の番号の組み合わせにより表記した。本報告の遺構番号は、平城宮跡発掘調査部遺構調査室（平成18年（2006）より都城発掘調査部遺構研究室（平城地区））が設定した地区割りをもとに平城京左京の遺構番号台帳にもとづいた通し番号となっている。

SA（塀・柵・杭列）、SB（建物）、SC（回廊）、SD（溝・暗渠・木樋）、SE（井戸）、SF（道路・園路）、SG（池）、SJ（埋甕・土器埋設遺構）、SK（土坑・土器埋納遺構・くぼみ）、SP（柱穴）、SU（土器溜まり）、SX（その他）、SZ（古墳）、NR（自然流路）。

7. 訳は各節末尾にまとめた。

8. 平城宮出土軒瓦・土器の編年は、以下のようにあらわす（括弧内は西暦による略年式）。

軒瓦：I-1期（708～715）、I-2期（715～721）、II-1期（721～729）、
II-2期（729～745）、III-1期（745～749）、III-2期（749～757）、
IV-1期（757～767）、IV-2期（767～770）、V期（770～784）

土器：平城宮 I（710）、II（720）、III（740）、IV（760）、V（780）、VI（800）、VII（825）

9. 本報告の編集は、都城発掘調査部長箱崎和久の指導のもと、今井晃樹がおこなった。

謝 辞 本報告の作成にあたっては、以下の方々、機関の協力を得た。記して謝意を表したい。

国土交通省近畿地方整備局国営飛鳥歴史公園事務所、バンダリ スダルシャン（株式会社パレオ・ラボ）、杉山真二（株式会社 古環境研究センター）、金原正子・金原美奈子（一般社団法人 文化財科学研究センター）、鈴木瑞穂（日鉄テクノロジー）、高橋 敦（古生態研究所）。